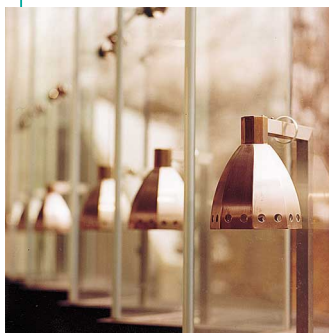


ことばのうみ

宮城県図書館だより

MIYAGI PREFECTURAL LIBRARY No. 7 2001. 3

宮城県図書館展示室 ▶
常設展
「本と人の文化史
～ アジア・日本を中心に～」



▲ 図書館アートシリーズ
アトラクター (Attractor)
(宮城県図書館地形広場
「ことばのうみ」中央)

特集

図書館はビジネスにも役に立つ

ビジネスマン&ウーマンのための図書館利用術



黙の豊饒

辺見 庸

「十の口に上らんよりは、あはれ一の胸に上らん。朗讀せられんよりは、黙讀せられん」と書いた齋藤緑雨の気持ち、若いころ、腑に落ちなかった。書いたものは、たくさんの方が声にして読んでくれたほうがよっぽど嬉しかろうに、と思った。日々読みかき書く身になつたいま、緑雨の心持ちがわかる気がする。詩や文のよき朗讀は、それはそれ、耳に心地よいけれども、他者の声に想像が限定される。自分で音読すると、地声に心が萎える。唱和はさらに気味がる。言葉は、やはり、個々人が胸中に溜めた沈黙の間にこそ、じつによく舞い、じつによく泳ぐのである。

では、十の口より一の胸に上らん、という願いはどうだろう。売れない物書きのつよがりだろうか。いや、万人の口に唱えられるより、無告の読者の、胸底の最暗部に達する言葉を紡ぐのが、書く側の真骨頂なのだ。そのような文は、たぶん、音読になじまない。言葉が沈黙を負っているからだ。黙こそ饒舌である。

(へんみ・よう 作家)